

令和2(2020)年度 第1学期終業式 式辞

私たちが、いまだかつて経験したことのない1学期が終了しました。とても長い期間であったように感じられます。当初は、新年度からの登校再開を考えていたものが、結局はいまだに通常一斉登校を実現できず、2学期以降についても予断を許さない状況であると言わざるを得ません。そのような状況において、君たちはよく健闘していたと思います。ネットワークを通じての課題のやりとりにおいて、非常に真面目に取り組んでいる、あるいは、30分の短い授業の中でも、とても協力的である、といった報告を、先生方より数多く受け取っています。学習の進捗に対する不安は小さくなかったと思いますが、そんな中でも、できる限りのことをやろうという意気込みを示したということは、必ずや今後生きるものであると考えます。

学習面ばかりではなく、学校行事や生徒会活動においても大変な制約がありました。中でも、体育祭を中止するという判断は、私にとっても痛恨の極みでした。それでも、6年生諸君、特に各色団長をはじめとする幹部諸君は、実によく対応してくれました。ギリギリまで実現の可能性を探りながら、実施あるいは中止の場合どこにどのような影響が及ぶのかを冷静かつ柔軟に考えつつ、議論を重ねてレポートにまとめたその仕事、あるいはまた、体育祭の精神を次代に伝えていこうという使命感には、改めて心から敬服します。5年生以下の諸君には、誇りをもってこれを受け継いでいってほしいと願っています。

一方、生徒会やクラブ・同好会の活動においても、かなりの制約を余儀なくされました。先日延期を発表した文化祭についても、例年通りの形式で開催することは難しいかもしれません。そんな中で、行政委員会や文化祭実行委員会といった、諸君の活動の各部署から提案されてくる事柄が、時を追うごとにしっかりと具体的な展望を持ったものになってきているという手応えを感じています。諸君が主体的に取り組めば、この制約の中でも、例年に比べて遜色のないものを学び取ることができると思いますし、ぜひそうしなければならないと思っています。ともに頑張っていきましょう。

中学1年生諸君は、登校が叶ってからも、なかなか自由に立ち回ることができないと感じる日々が続いているのではないのでしょうか。先日、クラブ紹介のイベントが実施され、ようやく先輩方との交流の一端を感じることができたところなのかもしれませんね。焦ることはありません。部活動のみならず、この学校のいろいろな側面をじっくりと見定めて、徐々に、そして確実に、自分の居場所を形づくっていきましょう。

さて、先週は期末試験が行われましたが、君たちはどのようなことを感じていますか。もとより、学校の試験に意味のないものはありませんが、今回の試験は本当に重い、意味のあるものであったと思います。それは、言うまでもなく、自宅学習期間中からの君たち自身のありようを反映しているという意味において、ということですね。ネットを通じた課題のやりとりにおいては、積み残してしまった課題はありませんでしたか。友人などと直接対面できない孤独感の中で、その積み残した感覚にどのように対処してきましたか。登校が再開してからはどうでしょう。学校に滞在できる時間が限られ、しかも社会的距離を保つなど新しい生活様式の実践が求められる中で、普段よりも短い授業に、どんなふうに臨みましたか。そこに、思い通りに身動きできない自分を見出したとしても、それは無理からぬことだと思います。

そんな、何とも言えない覚束ない感覚、あるいは不安感の中で、君たちが今回の試験に臨んだのだとすれば、私は君たちに次のことを強く望みたいと思います。それは、不安な自分をそのまま認めてあげることです。つ

まり、何かと制約が多かったこの期間に、何を思い、考えたかというところまで、自分がやってきたことをすべて肯定的に評価しよう、ということなのです。十分にやりきれなかった、うまくできなかったと悔やんでいるのであれば、それは頑張っているからこそ思えることです。身動きできずにあがくのは、すでに努力しているからなのです。不安感の中にこそ、明日のジャンプアップの端緒があると信じてほしいと思っています。

この長く続く自粛期間、多くの人々は不安を抱えています。その不安が生むイライラを、感じ取ることはありませんでしたか。そのイライラに直面したとき、どのように感じましたか。“誹謗中傷”ということがよく話題になりましたが、私は、その源にこの不安感があるのだと思います。(もちろん、不安を感じている人のすべてが、誹謗中傷を口にするわけではありませんが。)自分の規範意識から外れた行為を目にしたとき、どうしてもそれを看過できずに強い言葉を使ってしまう、ということなのではないでしょうか。このときの規範意識の揺らぎが不安感を生み、それに耐えるのは難しいことです。だからこそ、不安である自分をそのまま認めてあげることが大事なのです。覚束ない自分を受け入れることによって、私たちは他者への寛容の心を得ることができるのだと思います。そこには信頼関係が生まれ、信頼に基づいて学ぶ者の視野は、一気に開かれていくのです。

いつもより少し短い、特殊な夏休みに入ります。1学期の成果を振り返って、あれこれと思いを巡らせてみてください。

以上をもって、式辞といたします。

令和2(2020)年 8月1日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦